Japanese Association for Religious Studies

インターネット開発思想と宗教的共同性の邂逅

今井信治

本発表は、近年拡大している宗教のインターネット利用について、CMC空間とは宗教情報を配信する道具であるのか、それとも宗教実践を行う環境であるのかという問題意識に立ち、インターネット開発思想と当時の文化的思潮に焦点を当てたものである。特に、カリフォルニア州で開発され、インターネットの前身とされるARPAネットの開発・設計思想を概括し、同時代的・同一地理的に共有された「カリフォルニアン・イデオロギー」と呼ばれる概念をフックにしながら、インターネットが独自の共同性を構築していった様相を論じた。

ARPAネットの設計者であるJ・C・R・リックライダーとR・テイラーは、共にアメリカ南部出身・牧師の息子・音響心理学を専攻し、M・マクルーハンの思想から影響を受けていたことが知られている。彼らの抱いていた設計思想は、ARPAネットが始動する一年前の一九六八年に共同執筆された「コミュニケーション・デバイスとしてのコンピュータ」に見ることが出来る。この論文では、ネットワークがデータなどを共有するシステムと言うよりも、コミュニケーションを助長し、コミュニティを形成するために用いられる旨が書かれ、「地域性ではなく、共通の関心に基づくコミュニティを創る」ことが強調された。今日にも通用するコミュニティとしてのネットワーク、情報格差問題、電子民主主義などというトピックがちりばめられた論文である。

そうしたコンピュータ・ネットワークが一般に膾炙するのは一九七〇年代後半以降のことであるが、六〇年代から七〇年代に掛け、同じくアメリカ西海岸地域において「カリフォルニアン・イデオロギー」と言うべき思潮が共有されていたとバーブルックとキャメロンは提起した。彼らは、対抗文化が隆盛したこの時期のイデオロギーを、先端情報技術と自由主義的個人主義を結び付けた「ハイブリッドな宗教」と解釈している。この時期、多くのヒッピーらが自然への回帰を掲げたことが知られているが、そのヒッピー文化のバイブルとされた *Whole Earth Catalog* を刊行し、現在も活躍しているスチュワート・ブランドは、禅やLSD、神秘主義とテクノロジーを融合させる活動を展開していた。彼はカリフォルニアン・イデオロギーを体現している人物と言え、前掲書は今日におけるインターネット・コミュニティの役割を果たしたと語っている。こうしたテクノロジー信仰の中、一九七八年に最初期のBBSが開発された。その最初のテーマは「旧来の宗教に取って代わる新しい宗教」であり、冒頭句は「私たちは神のようなものだ」だったという。ここにおいて、宗教という「共通の関心に基づくコミュニティ」が創始されたと言えよう。ただし、それは時として大衆文化と気軽に結び付きながら展開する緩やかなコミュニティである。

宗教研究において取り沙汰されるニューエイジ運動あるい

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

はスピリチュアリティと呼ばれる領域では、その“Do it yourself”や“Back to nature”といった精神が着目されることが多い。しかし、各種テクノロジーとの融合を標榜する集団もまた、連綿と存在していることが指摘出来るだろう。今日、リックライダーらがインターネットに求めた「共通の関心に基づくコミュニティ」の構築は実現している。そのコミュニティの凝集性は伝統宗教のそれに較べるべくもないかも知れないが、宗教の周縁に位置する人々を緩慢に取り込むだけのインフラを備えていると言えよう。それが宗教実践を行う環境となるかは未知数であるが、現実地理的な空間とCMC空間との境界が融解しつつある現在、注目すべき対象と言い得るだろう。

宗教の社会貢献の領域と形態

稲場圭信

宗教の社会貢献には長い歴史がある。日本においては、古代には、皇族、地方官吏、豪族などによる弱者への救済活動があったが、仏教を基盤とした救済活動も存在した。身寄りのない貧窮の病人や孤老を収容する救護施設として聖徳太子や光明皇后が設けた悲田院や施薬院が仏教の慈悲をもとにした慈善事業として知られている。奈良時代の行基の公共事業も有名である。中世では、永観をはじめとする平安末期の浄土教の聖たちの社会奉仕活動があった。近代における慈善事業は、感化救済事業を経て近代社会事業へと発展した（一八八〇年、YMCA日本で設立、一八八七年、キリスト者石井十次が岡山孤児院を設立、一八九七年片山潜が東京にキングスレー館を設立しセツルメント運動、一九二〇年、賀川豊彦が生活協同組合を設立）。

このように、宗教は確かに社会に貢献している。その内容は、災害時救援活動、発展途上国支援活動、平和運動、環境への取り組み、地域での奉仕活動、医療・福祉活動、教育・文化振興など非常に多岐にわたる。しかし、宗教の社会貢献は、直接的に目に見える社会的実用性のみから問われるものではない。人間として生き方、社会のあり方を根本から問い直したり、思いやりの精神を滋養したりすることも宗教の社会的役割であり、社会貢献ではないか。

そこで、私は、「宗教の社会貢献」を「宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連する文化や思想などが、社会の様々な領域における問題の解決に寄与したり、人々の生活の質の維持・向上に寄与したりすること」とゆるやかに定義している。

宗教の社会貢献の領域に関しては、この一〇年ほどの研究、さらには、日本経団連による企業の社会貢献活動の領域なども参照しながら、以下の八つ、すなわち、①緊急災害時救援活動、②発展途上国支援活動、③人権・多文化共生・平和運動・宗教間対話、④環境への取り組み、⑤地域での奉仕活動、⑥医療・福祉活動、⑦教育・文化振興・人材育成、⑧宗教的儀礼・行為・救済、に分類している（稲場圭信・櫻井義秀編著『社会貢献する宗教』世界思想社、二〇〇九）。さらに、①社会教育活動、②社会奉仕活動、③社会事業活動（猪瀬優理、稲場・櫻

NII-Electronic Library Service